

大阪府

水都大阪と呼ばれ続けるために

大阪府立水都国際中学校 一年

村井 栞恋

私の住むまち大阪は「水の都」と呼ばれている。ぐるりと巡る河川や堀川を利用した水運が盛んで、川とは深い関係にある。そんな水都大阪の観光の一つに、東横堀川でのサップ体験がある。誰でも楽しめる水上体験だ。私は小学校の卒業遠足を提案する学習で、この体験が入ったプランを提案し、実際に遠足で行くこととなった。当日は円盤状のサップの上でご飯を食べたり、みんなで漕いだりして楽しんだ。ボートの上、川に反射した光の中、街を見上げる。水で溢れる水都大阪ならではの体験で、何より、友達と体験できたことがとても嬉しかった。

しかし、こんな体験をさせてくれた大阪の川にも欠点がある。水質だ。私たちが訪れた川も綺麗とは言えず、無臭だが緑にごっていった。サップのガイドの人によると、これでも昔よりは綺麗になったらしい。証拠に、最近この東横堀川と繋がっている道頓堀川で、ニホンウナギが見つかったそうだった。しかし、絶滅危惧種のウナギが見つかったなんて本当だろうか。

大阪市のある道頓堀川。高度経済成長の時に工業廃水が垂れ流された影響で、汚染が深刻になった。まだ大阪の浄水技術は低く、今よりもさらに汚かったそうだった。おどろいたことに、川にはカーネルサンダースの像や自転車も投げ込まれていた。油の膜が張り、ボウフラさえ湧かない川は悪臭を放ち、「ドブ川」とも呼ばれた。当時の画像を見た時は、墨汁のような黒さで絶句した。

その状況を打破しようと、一九八〇年ごろから水質改善への取り組みが始まった。まず、水質浄化が期待できる噴水が設置され、次にヘドロを取り除くための船の運航が開始された。浄化作用のある真珠貝の養殖も行われた。「どうせやっても真珠

は真っ黒やろ」と思われたが、ピンク色の綺麗なパールができたそうだった。しかし、まだ川は綺麗にならなかった。商店街の活動で金魚が放たれれば、すぐに数匹が水面に浮いてきてしまつたし、人が飛び込めば病人も出た。それでも水質改善への取り組みは続いた。二〇〇〇年には水門が作られ、淀川の水を道頓堀川に流す「入れ替え」という仕組みもでき、下水処理の精度も上がった。サケやアユが住める水質だということが数値によって判明し、水質が概ね改善傾向にあるということも調査で分かった。でも私は大阪に住んでいながら、大阪の人々の川に対する努力を微塵も知らなかった。私より先にニホンウナギは、人々の努力に気付き、川に帰ってきてくれたのだ。

水都大阪を支える川。そして、卒業前にみんななどの思い出をくれた川。でも、これまでの努力をもつてしても、まだ透き通るには至っていない。改めて水を綺麗にすることの大変さが分かった。二〇二五年には大阪万博が開かれるが、この現状ではまだ「大阪は水の都です」と胸を張って言えない。だから、一大阪人として水を綺麗にしたい。まずは知ってもらうことからSNSを使えば、多くの人、特に若い人に今の大阪の河川の状況や取り組みについて知ってもらえるだろう。そして、その人たちにも、自分のできることを探して取り組んでほしい。私自身も、今まで気にもしなかった生活用水の使い方を考え直したい。例えば、小さなゴミも流さないことや、植物由来の洗剤を使うことなどだ。他にも、カイロは汚れた水を綺麗にする効果があるそうなので、集める事にも協力したい。一つ一つは小さな活動だとしても、それが波紋を呼べば大きな波になる。だから私は、それを信じて活動しようと思う。

大阪の川の恵みは周りに文化を作り、物流を発展させ、大阪の人を支えてきた。だから、これからも水都大阪と呼ばれ続けるように、そしていつか「大阪は水の都です」と胸を張って言えるように頑張りたい。